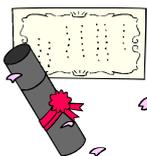


秋田県立視覚支援学校寄宿舎



# あいあい通信



No.9 令和2年 3月19日 発行

## 同じ釜の飯を食べる



校長 鈴木 和人

昨年の4月、視覚支援学校に赴任して早々に寄宿舎を見学させてもらった。春休みであったこともあり、まだ舎生は居らずガランとしていた。清掃がゆきとどいており整理整頓が見事にさせている。でも生徒たちはどんな思いでここで暮らしているのだろうと悲観してしまった。



現在、全国には67の視覚支援学校・盲学校があり、約2700人の児童生徒が学んでいる。この内、寄宿舎で生活をしているのは1000名ほどである。本校も108年の歴史と伝統のある秋田県で唯一の学校であるから、これまで多くの児童生徒が寄宿舎で成長し、社会に巣立っていったはずである。今年度は中学部2年の2名が新たに入舎し、6名が生活を共にしてきた。10月からは7名に増えて冬の生活を送ってきた。

先日、卒業・進級を祝う会に参加させてもらった。案内状の作成、飾りつけや会場の準備、会の進行まで全員で分担して行ってくれた。当日は職員や非常勤の方々を入れて16名の参加者であった。テーブルを囲んでわいわいがやがや始まったとき、そう言えばこの雰囲気どこかで経験したことを思い出した。今から40年も前になるが高校を卒業し進学のために東京に出たが、苦勞している親の姿を見て新聞配達をして奨学金をもらっていた。北は北海道から南は沖縄、全国から同じような志で集まった10名ほどの学生たちと4年間、新聞販売店の2階に住み込んで生活していた。その時の夕食の風景

である。久しく思い出すこともなかったが、ふと夢中で夢を追いかけて、同じ釜の飯を食べていた当時の仲間のことを思い出した。よく食べ、よく飲み、よく議論したものだ。みんな今は還暦前後の年になり人生の成熟期に入っているはずである。今でも年賀状や電話のやり取りをする数人とは「退職したらまた、みんなで会おうな」と言っている。先輩であり、友であり、兄弟のような関係である。雨の日や風の日配達の、夜討ち朝駆けの集金は辛いなと思うこともあったが、同じ時代に同じ志を持った仲間がいて同じ釜の飯を食べていたことが支えになっていたと思う。

話を祝う会のテーブルに戻すと、お父さんのようにみんなを守ってくれる高等部専攻科保健医療科2年の男子生徒、お母さんのように大きな愛情で包んでくれる高等部専攻科生活情報科修了生、一番上の優しいお姉さんの高等部専攻科保健医療科卒業生、控えめな、二番目のお姉さんの高等部専攻科保健医療科2年女子生徒、喧嘩するほど仲がよい双子の中学部2年の女子生徒2名、末っ子の元気な中学部1年の男子生徒、みんなの個性が集まって温かい一つの家族になっている。それぞれみんななくてはならない存在、そんな風に思えてならない。



保健医療科の卒業生は3年間の寄宿舎生活を卒業しますが、みんなで過ごした生活は忘れませんといていた。10年後20年後家族がそれぞれの夢を叶えて自立し、再会する日も来るでしょう。思い出を大切に過ごして行って欲しいものです。

### 生活の一コマ



【アイロンがけ】



【ごはんの配膳】



【当番活動の浴室掃除】



【聴覚・視覚合同茶話会】



【学習室での勉強】



【生活目標の掲示】

